当館の尖頭器資料について　～調整作業の詳細な検討～

長屋幸二

An Introduction to points which are on display in Historial Exhibition Area 1.

～A detailed investigation about retouch work～

Koji NAGAYA

1．はじめに

2003年1月現在、岐阜県博物館人文展示室1「旧石器時代から縄文時代の石器へ」のコーナーに、3点の尖頭器資料が展示してある。1点は八百津町教育委員会が所蔵する八百津町久田見越水遺跡出土の有舌尖頭器で、当館が借用しているものである。この資料は岐阜県史（大参・安達ほか，1971）・八百津町史（八百津町史編纂委員会，1976）の中ですでに紹介されている。しかし、残る2点は図化されていない資料である。これらの資料が今後の研究活動に用いられるよう、図化して紹介することにする。

今回、資料紹介を行うにあたって特に調整剥離のあり方を詳細に観察した。対象とした資料はそれぞれ単体で地表面採集されたものである。もし、多くの一括資料が得られている状況でこのような観察を行ったならば、うまくすれば集団や文化のレベルのみならず、石器製作者の癖やスキル、意図など個人レベルにまでアプローチする材料を提供できるかもしれない。

資料的な制限から結論めいたことをいうのは難しく、研究課題の提示に終わる点が多いかと思う。ただ、石器観察、図面作成、図面読みとりなどの視点として参考にしていただけたなら、石器研究に寄与できるものと信じている。

2．資料の検討

＜資料1　採集地不明　下呂石製尖頭器＞

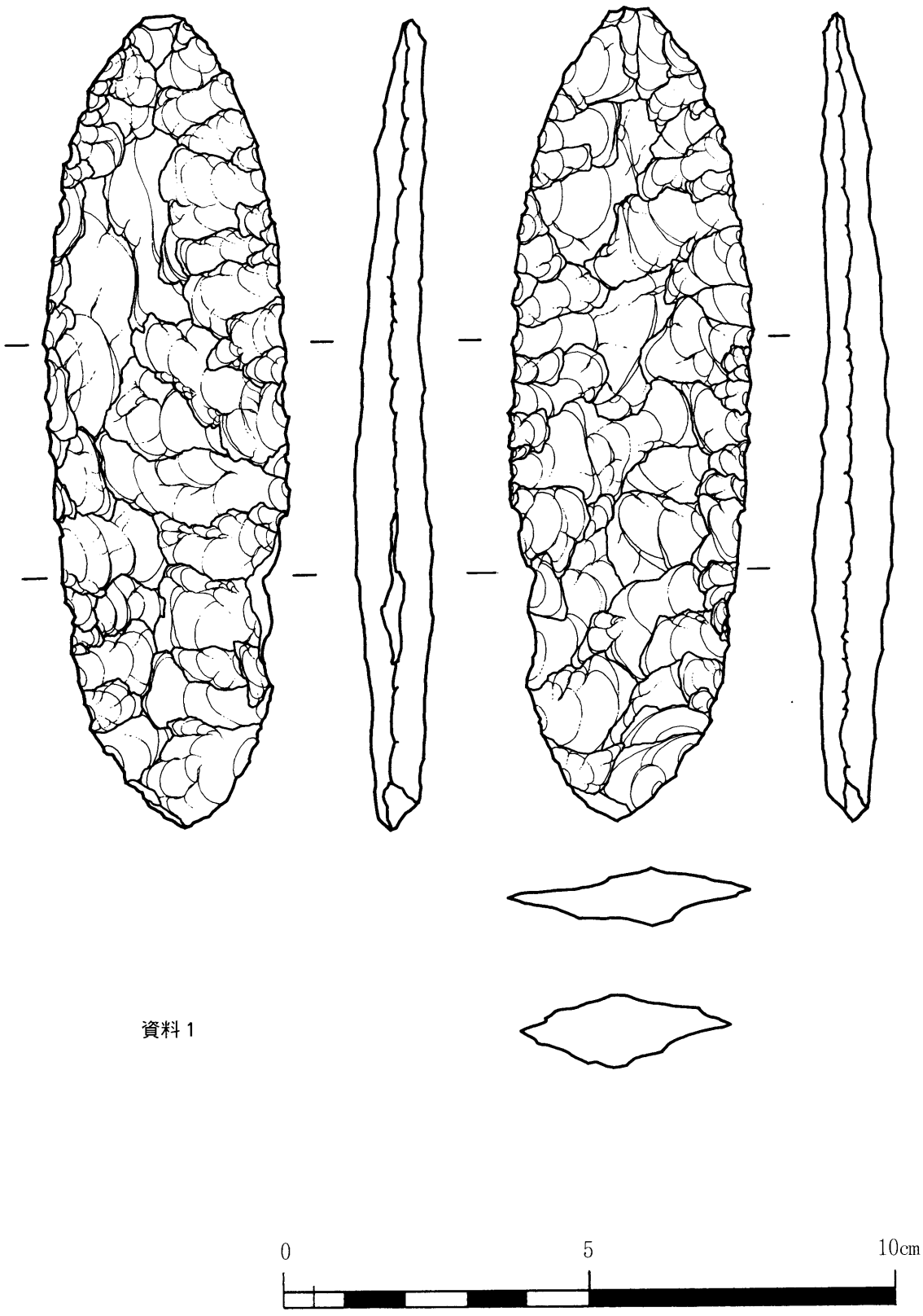
資料1は長さ132mm、幅39mm、最大厚12mm、質量52.5g。大型で幅広タイプの尖頭器である。両側縁がほぼ平行に走り、緩やかな弧を描きながら収束して両端に尖部を作り出している。平面形からは上下の判別に迷うが、端部に素材の面が分厚く残り、鋭いエッジが形成されず刺突機能部としては不適当であり、調整剥離によって厚さを減じきれていない方を基部とした。基部側は側縁と尖部の転換がやや明瞭で、端から2cmほどのところに転換点が認められる。尖頭部と左面右側縁の下半に新しい欠損面が見られる。

石材は、風化の浅い良質の下呂石を用いている。緻密な漆黒部分にやや軟質の白い部分が縞状にはいり、剥離もその材質の影響を受けている。軟質部分は剥離が厚く入り、漆黒部分で蝶番状に立ち上がる。ほぼ全面が調整剥離によって覆われ素材面はほとんど残っていないが、原礫のサイズは人頭大程度かそれ以上であろうと考えられる。おそらく露頭かその周辺で採集された角礫もしくは亜角礫が素材であろう。

下呂石製尖頭器の生産遺跡として、下呂町大林遺跡が知られている。大林遺跡は下呂石露頭崩落崖に近い小川谷の上流部に位置し、大林集落周辺でも良質の下呂石岩塊が採取できる。飛騨考古学会旧石器分科会などにより踏査が進められ(飛騨考古学会旧石器分科会，1995，2001)、下呂町教育委員会によって試掘調査も行われている（下呂町教育委員会，2000)。尖頭器の未成品などが数多く得られ、製作地の状況が明らかになりつつある。しかし、岐阜県内における下呂石製尖頭器の出土例は数少なく、消費地のデータはまだ不足している。この資料は下呂石製尖頭器の流通を追ううえで貴重な成品である。しかし、残念ながら、当資料は採集地不明となっている。当博物館に寄贈されたのは1977年、博物館開館から間もない頃である。

調整剥離は総じて薄くて深く、打点位置の推定はできるもののコーンは明瞭には認められない。調整剥離はソフトハンマーによる押圧剥離によると考えられる（鈴木・五十嵐ほか，2002)。

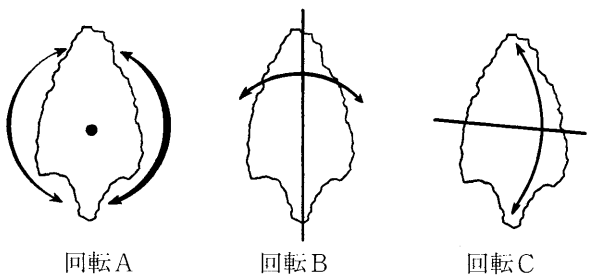
図面左側の面（以下左面と記す）では、左側縁からの剥離を右側縁からの剥離が切っている。図面右側の面（以下右面と記す）では、左側縁からの剥離を右側縁からの剥離が切っている。リングの状況から、両側縁とも左面と比べて右面の調整剥離の方が全体的に打点が近いように観察される。これは左面の打点が右面の剥離によって除去されたことを示す。以上の観察から、①左面左側縁→②左面右側縁→③右面左側縁→④右面右側縁という



第1図

順に調整が進んだことが読みとれる。

こうした作業の流れの中で、対象物は回転A：厚さの方向の中心線を軸とする回転（遠くに置いてあった部位を手前に持ってくる２次元的な回転。同一面で左右を転換させる行為）。回転B:長軸方向の中心線を軸とする回転（横方向に裏返す。表裏面の転換および左右を転換させる）。回転C:幅の方向の中心線を軸とする回転（縦方向にぐるりとまわして裏返す。表裏面を転換させる）といった動きが加えられる（第２図参照）。こうした動きで区切られる作業のひとまとまりを調整工程と呼んでおきたい。



第２図　調整工程転換模式図

各調整工程における調整剥離の左右の切り合い関係は、いずれにおいてもランダムな剥離が見られるものの、①左面左側縁では総じて基部側から尖頭部に向かって剥離が進み、②左面右側縁では尖頭部から基部側に向かって剥離が進む傾向が見てとれる。これは、製作者が右利きであった場合、対象物の手前側から遠くへと順に剥離を進行させ、対象物を回転させて（回転A）やはり手前から遠くへ剥離を進めたという作業が復元できる（製作者が左利きの場合は対象物の遠くから手前に向かって剥離を進めたことになる。煩雑となるので、以下は製作者が右利きであったと仮定して記述する）。③右面左側縁は基部側から尖頭部に向かって剥離が進む傾向がある。②から③に移行する際には、対象物は回転Cにより裏返されている。④右面右側縁は尖頭部から基部に向かって剥離が進む傾向がある。③・④の調整工程とも、手前から遠くへ剥離を進めている。③から④への移行は回転Aによる。

以上、資料１の調整作業について詳細に述べてきたが、この作業をまとめると次のような工程が復元される。

・まず、基部を手前に、右面を上にして
①左面左側縁：手前から遠くへ
↓回転A
②左面右側縁：手前から遠くへ
↓回転C
③右面左側縁：手前から遠くへ
↓回転A
④右面右側縁：手前から遠くへ

＜資料２　美濃加茂市内採集　安山岩製尖頭器未成品＞

資料２は長さ112mm、幅24mm、最大厚７mm、質量22.5ｇ。細身タイプの尖頭器の未成品としてとらえている。一側縁は緩やかな弧を描くがもう一側縁は直線的であり、左右は非対称である。ただし、直線的な側縁の下半分は調整剥離が薄くて浅い。調整が進めば柳葉形を呈する。

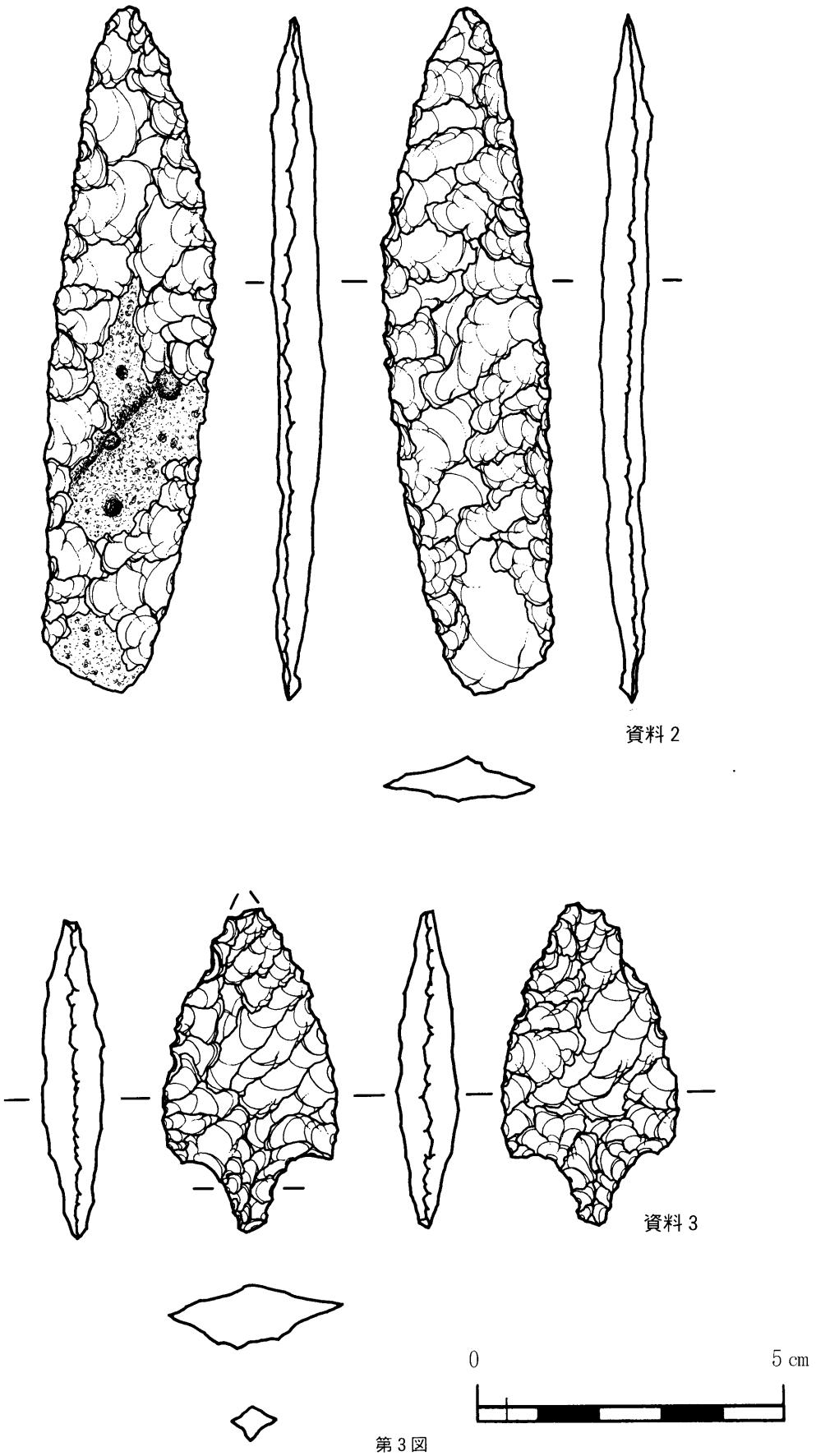
石材は安山岩を用いている。表面は灰白色に風化し、新欠部には不透明な黒色が見える。背面に礫面が残るが、爪状の小さなクラック、バブル状の窪みが見られ、肉眼観察ではサヌカイトに酷似して見える。腹面には素材の主要剥離面が基部と中央部付近に残る。幅広で大きくて薄手の素材剥片を横位に用いている。調整剥離は薄く、コーンは明瞭ではない。

左面では左側縁からの剥離が右側縁からの剥離によって切られている。左側縁の剥離はランダムで、上半は打点が残るが下半は裏面の剥離によって除去されている。右側縁は総じて基部から尖頭部に剥離が進んでいる。打点は残るが、尖頭部に打点の残らない部位がある。右面では左側縁からの剥離が右側縁からの剥離によって切られている。左側縁は総じて尖頭部から基部に向かって剥離が進むが、下半ではランダムな部分も見られる。尖頭部の２枚の剥離のみ打点が残るが、他は残らない。右側縁は基部から尖頭部に剥離が進み、下半部には潰れ状の細かな剥離が施されている。この細かな剥離には打点が残るが上部の剥離には残らない。

こうした観察から、当資料の調整工程は次のように復元できる。

・まず、基部を手前に、左面を上にして
①右面左側縁：遠くから手前へ
↓回転A
②右面右側縁：遠くから手前へ
↓回転C
③左面左側縁：ランダムな剥離
↓回転
④左面右側縁：遠くから手前へ

↓回転B	↓回転C
⑤ａ右面右下半部	⑤ｂ右面左上部
↓回転A	↓回転A
⑥ａ右面左上部	⑥ｂ右面右下半部



第 3 図

⑤⑥でｂの工程をとったならば、回転はＡとＣを交互に繰り返すことになる。

当資料と類似する資料が上石津町史に紹介されている（上石津町，1979）。やはりサヌカイトに類似する安山岩を用い、一側縁を弧状に、もう一側縁は調整を発達させずに非対称なまま残している。これらの資料を尖頭器の未成品としてとらえるならば、この地域へのサヌカイト製尖頭器の搬入のあり方をうかがうことができる。

また、この形態が完成品である可能性もある。上の観察からは、一通り全体に剥離を施して形状を整えた後、下半部の広い範囲に微調整ともとれる細かな剥離が入るという調整工程が復元できた。この部位を未完成部として評価するならば、最終的に施された潰れ状の調整の意味を考えなければならない。この形態を完成形とし、基部調整として解釈することも可能である。

上石津町出土の資料や、他のサヌカイトに類似する安山岩製尖頭器について検討を加えながら、答を導く必要があろう。今回は問題提起にとどめておきたい。

＜資料３　加茂郡八百津町越水遺跡採集　チャート岩製有茎尖頭器＞

越水遺跡は八百津町久田見高原に所在する。ナイフ形石器文化の終末に位置づけられる縦長剥片素材の小形のナイフ形石器を主体とする石器群が採集されている。旧石器時代の資料以外にも、当資料や尖頭器、石鏃などが採集されている。

資料３は長さ53㎜、幅28㎜、最大厚10㎜、質量12.5g、幅広で、やや厚手の有茎尖頭器である。赤色の良質のチャート岩を用いている。表裏面の右側縁は、剥離痕の稜線が斜め方向に平行して走る「斜並行剥離」で覆われ、美しく仕上げられている。左側縁からの剥離は浅く、方向も不揃いな部分もあるが、剥離痕の幅はよくそろっており、やはり美しい仕上がりを念頭に置いた並行剥離によるものである。返しは発達しないが基部の抉りは急角度に入り、茎部を長く明瞭に作出している。尖頭部は節理面において欠損している。

左面では、胴部右側縁からの斜並行剥離は胴部左側縁からの剥離に切られている。胴部右側縁の剥離は下から上へと規則的に行われている。この斜並行剥離の後、返し部付近に２枚の剥離が行われている。打点は裏側の剥離によって除去されているものがほとんどだが、下方の２枚には打点が残る。胴部左側縁の剥離は上から下へ進んでいる。こちらの打点は残る。これら胴部の調整剥離は基部の調整剥離に切られるが、胴部返し部付近の剥離痕は基部の剥離も切っていることから、この調整剥離は尖頭器製作の最終段階で行われたことがわかる。（基部の調整剥離は総じて厚いが、この部位の素材改変度はそれ以上に大きく、調整剥離は数度にわたって行われたであろう。我々に観察できるのは最終段階の調整のみであり、作業全てを読みとれるわけではない。）基部右側縁からの剥離は基部左側縁からの剥離に切られる。基部左側縁には打点が残るが基部右側縁の打点は残らない。抉り部分に大きな剥離痕があり、この剥離痕を切るように茎部右側縁・左側縁の剥離が下から上へと進んでいる。

右面も左面とほぼ同様に作業が進んでいる。胴部右側縁からの斜並行剥離は胴部左側縁からの剥離に切られている。胴部右側縁の剥離は下から上へと規則的に行われているが、打点は裏側の剥離によって除去されている。胴部左側縁の剥離は上から下へ進んでいる。下方の３枚ほどを除いて打点は残っている。これら胴部の調整剥離は基部の調整剥離によって切られている。基部右側縁からの剥離が基部左側縁からの剥離に切られる。基部左側縁には打点が残るが、基部右側縁の打点は残らない。やはり抉り部分に大きな剥離痕があり、この剥離痕を切るように茎部右側縁・左側縁の剥離が下から上へと進んでいる。

以上より、当資料の調整作業は次のように復元できる。

・まず尖頭部を手前に、右面を上にしたとして

胴部

①左面右側縁：遠くから手前へ

↓回転Ｂ

②右面右側縁：遠くから手前へ

↓回転Ａ　↓回転Ｃ

③a～d右面左側縁　③e左面左側縁:遠くから手前

↓回転Ｂ　↓回転Ｂ

④a～d左面左側縁　④e右面左側縁:遠くから手前

回転Ａ　回転Ｃ　回転Ａ

基部

⑤ab左面右側縁　⑤cd右面右側縁:手前から遠く

↓回転Ｂ　↓回転Ｃ

⑥ab右面右側縁　⑤cd右面左側縁:手前から遠く

↓回転Ａ　↓回転Ｃ　↓回転Ａ　↓回転Ｃ

⑦a右面左側縁　⑦b左面左側縁　⑦c右面右側縁　⑦d左面右側縁

↓回転Ｂ　↓回転Ｂ　↓回転Ｂ　↓回転Ｂ

⑧a左面左側縁　⑧b右面左側縁　⑧c左面右側縁　⑧d右面右側縁

↓回転Ａ　↓回転Ｃ　↓回転せず　↓回転Ｂ

⑨胴部左面右側縁返し部分

最初に右面を上にした場合の作業工程を復元したが、最初に左面を上にした場合の、①～④工程の左右面を逆にした作業も成立する。したがって、都合16パターンの作業工程が想定できることになる。その中で、③工程以下がaのパターンをとった場合、調整工程の転換は回転Aと回転Bを交互に繰り返す規則的なものとなる。

さて、県内の資料に限らず、有茎尖頭器の斜並行剥離は右側縁に見られることが圧倒的に多いようである。剥離の進む方向とあわせて統計的に検討すれば、彼らの利き手や調整作業の規則性にアプローチできるのではないだろうか。

3．3点の資料について調整作業を概観すると

調整剥離の詳細な検討から、「作業部位の転換方法」と、「各調整工程における剥離の進み方」の2点が復元された。今回扱った3資料について、それぞれの視点から触れ、まとめとしたい。

・作業部位の転換について

資料1は回転Aと回転C。資料2も回転Aと回転C。資料3は回転Aと回転B。3点の資料全てにおいて、特定の2種類の回転を交互に繰り返すことで作業を進めることが可能である。

・各調整工程における剥離の進み方について

資料1は全ての調整工程において手前から遠くへ剥離を進めている。資料2も遠くから手前に、資料3の胴部は遠くから手前（基部は茎部の根本から先に向けて進む）に剥離が進む傾向にある。調整剥離は（有茎尖頭器の基部をのぞいて）各工程において対象物がどのようにおかれたかにとらわれて、特定の方向に作業が進む。そのため、回転Aと回転Cによる資料1と資料2では、右側縁と左側縁で基部側から尖頭部へ進む剥離と尖頭部から基部方向に進む剥離が対照的に見られる。資料3は斜並行剥離をとるために、斜並行剥離を基部側から尖頭部に進める必要があった。手前と遠くを逆転させない回転Bを用いたのはそうした理由からであろうか。

4．最後に

日本考古学における石器研究の特徴として、剥離面の切り合いを重視する実測図の伝統（松沢　1959、1960）がある。本論はこれを、より有効に用いるための一つの試論である。私は、今まで剥離の切り合いを図面上で表現する際に、細部の観察にとらわれ、こうした全体的な工程の流れについてどれほど留意することができていたか。工程を復元するのに矛盾をきたすような図面もあったのではないかと思う。個人的に反省しながら今回の検討を行った。

こうした検討はシビアな石器観察を求めることになる。しかし、石器研究が石器そのものの研究にとどまらず、石器を製作した「ヒト」や「社会」に対してアプローチすることを目指す以上、必要となる作業であると感じている。

参考文献

大参義一・安達厚三ほか　1971.「第2章先土器時代　第2節岐阜県内の主な先土器時代遺跡．2木曽川中流域の遺跡」『岐阜県史通史編．原始』岐阜県 pp.64-69

春日井恒　2002.「府県別集成．岐阜県」『第4回関西縄文文化研究会．縄文時代の石器－関西の縄文草創期・早期－』pp.365-438

上石津町　1979.『上石津町史通史編』

下呂町教育委員会　2000.『大林遺跡試掘調査報告書』

鈴木美保・五十嵐彰・大沼克彦・門脇誠二・国武貞克・砂田佳弘・西秋良宏・御堂島正・山田哲・吉田政行　2002.「石器製作におけるハンマー素材の推定」第四紀研究41(6) pp.471-484

飛騨考古学会旧石器分科会　1995.「飛騨・湯ヶ峰山麓の旧石器資料」『飛騨と考古学－飛騨考古学会20周年記念誌－』飛騨考古学会 pp.255-267

飛騨考古学会旧石器分科会　2001.「飛騨・湯ヶ峰山麓の尖頭器資料」『飛騨と考古学Ⅱ－旧石器特集号－』飛騨考古学会 pp.52-65

松沢亜生　1959.「石器研究におけるテクノロジーの一方向（1）」『考古学手帖』7 pp.1-2

松沢亜生　1960.「石器研究におけるテクノロジーの一方向（2）」『考古学手帖』12 pp.1-4

八百津町史編纂委員会　1976.『八百津町史通史編』